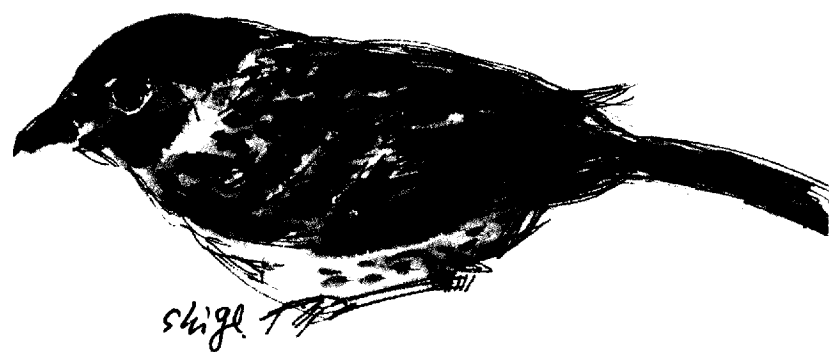


季刊 連句 第5号



季刊連句 第5号 目次

| | |
|---------------|-------------------|
| 花ごよみ(南柏雑記3) | 1 |
| ドイツの「連歌」 | 加藤慶二 2 |
| 俳諧師 その心と生活(2) | 東明雅 6 |
| 雪解け | 東明雅 12 (文)米谷貞子 |
| 「絶頂の城」 付勝練習歌仙 | 東明雅 14 |
| モロッコ吟行 | 中島啓世 11 |
| 岡野ひさの嬢送行歌仙 | 杉内徒司 16 |
| 五浦吟行 | 秋元正江 17 |
| 質疑応答<付心と付味> | 20 |
| 雁帛往来 | 20 |
| 連句会案内 | 21 |

表紙(雀) 岩満重孝

花ごよみ

南柏雑記 3

今年の冬ほど寒くて天気の良い年はなかった。特に忘れもしない一月の猫薙会の翌日、十九日に突然の大雪が降って以来、二三日ごとに雪が降って全くうんざりであった。気象台創設以来の降雪記録というがそれもうなずける。

今日は四月十日、例年ならば東京近郊の桜は散りかかっている頃なのに、やっと蕾がふくらんで色づいた程度、あと何日で咲くのか見当もつかない。それにくらべ紅梅・白梅・辛夷などが今盛りである。梅は花期が長いから、今年はおそらく梅と桜と一緒に見ることができよう。信州では梅と桃とアンズと桜と一緒に咲くのは珍しいことではないが、東京では滅多に見られない現象である。

私は柏に移り住んでから、今年で四度目の春を迎える

が、昭和五十六年には三月二十二日に庭のクロッカスやチューリップが満開で、桜も四月六日ごろが見頃であった。五十七年は一体に暖かだったと見えて、二月十八日に雪割草が咲き、三月一日ごろが梅の満開、三月十四日にはクロッカスやパンジーが咲き誇り、四月一日には桜が満開であった。

五十八年には、三月三日にクロッカスが花を開き、四月三日は関口芭蕉庵の枝垂れ桜が八分咲き、四月六日ごろには近くの広池学園麗沢大学構内の桜が満開であった。

麗沢大学は広大な敷地に見事な芝生と桜並木があって、花の頃には近所の市民がぞろぞろ入りこんでお花見(と言ってもお酒を飲んでどんちゃん騒ぎをするわけではない)をするのだが、守衛さんも学生さんたちも別にいやな顔もせず、にこやかに挨拶し、時には「今日は」とむこうから声をかけて行く学生さんも珍しくない。流石にモラロジを看板にしているだけあって、こんな気持のよい大学も日本には外にないだろう。今年も早くこの大学の花を見て、身心ともよい気分になりたいと思うのであるが、この気候では何時になるか、気になるこの頃である。

ドイツの「連歌」

加藤慶二

春と呼ぶにはまだ早い三月下旬、北ドイツハンブルクのアルスター湖畔にあるホテルの一室で、黄昏に沈む霧の湖水を眺めながら、俳人のクリンゲ氏とボフム大学日本学科を退官したハミツチュ教授と私と三人で食後のワインにやや微酔しながらもドイツの高等中学で「ハイク」教育がおこなえるかどうか、その可能性について話し合った。バイエルン州立科学アカデミーも積極的に協力するという。かつては難解とされていた俳句も両氏の談話をきいていると、それは杞憂であるかのように思えた。ハミツチュ氏は葉道と号しクリンゲ氏と同様ハイク実作者である。俳句だけが話題ではなかった。私の専攻分野からであろう、日本におけるヴァイマル古典主義の評価など質問を受けた。そして研究方法など日本の独文学者とドイツの日本学者は共通した意識と問題点をもっていることなど改めて確認された。ハミツチュ氏は別れぎわに「次の機会には皆でケテン

ゲディヒテをつくらうではありませんか」と提案した。ケテンとは鎖、ゲディヒテは詩で、それぞれ複数形。従って「鎖連歌」の意。これは私にとり驚きにも似た喜びであった。部屋に戻ったが身体は軽い昂奮でつまれていた。コニヤックを掌で暖めながら再び霧の夜景を眺めていた。いまから十年前、私はボン大学に日本学講師としてつとめていた。その時の主任教授故ツァハルト氏と、当時ドイツ語圏ではまだ誰も試みていなかった連句の実作を日独両語で、それも満尾するまで一年数ヶ月かかりながら両吟の試作をしていた。折しも明雅先生ご夫妻がヨーロッパへご旅行され、アテネからチュエリッヒを経てハイデルベルクまで訪ねられ、この作品について指導を受けたのがつい昨日のように思われた。

特にここ数年、ドイツの詩壇は短歌、俳句の影響を受け新しい詩型が試みられている。異文化の摂取とは程度の差

こそあれ、自国でそれを変化させることであろう。言語の構造も自然環境も文化も異なるドイツへ、日本の短詩型が移されれば新しい傾向の詩をもたらすのはけだし当然のことであろう。

ドイツ語圏へ日本の詩歌が初めて紹介されたのは一八四九年（嘉永二年）プフィツマイアーがヴィーンのアカデミー哲学・歴史部会で「最古の日本和歌知識への寄与」と題する講演で述べたことによる。彼はここで短歌や旋頭歌をとりあげ日本の古歌謡の形式について論じている。彼はその他、アイヌ語文法や独文の『日本語辞典』など著わし、ヴィーンから刊行されている。

連歌が「レンガ」或いは「ケテンゲディヒテ」としてドイツに伝えられたのは、今から七五年前、日本学草分けの学者ハンブルク大学教授カール・フローレンツ著『日本文学史』（ライプツィヒ 一九〇九年）による。この文学史は本文だけで六百ページを超えるが、連歌について述べている箇所は僅か四ページにも満たない。その紹介の是非については他日稿を改めようと思う。一八九九年にアストン著『日本文学史』がすでにでているが連歌についての項目はない。それに比べれば本書はかなりの労作といえよう。肝要な箇所を要約すると次のようになる。

十四世紀後半「ウタ」から派生した連歌——このことは中国から由来し日本に定着したものである——つまりケテンゲディヒトは大衆の興味の対象となった。新古今集と同様、おそらく中国の模倣と思われるが、

上の詩節と下の詩節が明確にわかれていられるにも拘らず、各詩節は一篇の作品を構成する。そして多数の人びとが順次参加して即興的に詠み愉しんだのであった。本来ウタは二人で詠まれてきたが、やがてそれでは飽き足らず「半詩句」を交互に「極度に複雑な方式」で並べながら、任意の人数が参加できるようにした。その方法は次のとおりである。

甲の人がホックとして三行の上の詩節を詠む。それを(1)とする。それにはいし乙の人が下の詩節(2)を詠むが、当然のこととして(1)と調和しなければならぬ。これにたいして丙が上の詩節(3)を詠むが、(1)とはまったく異なっていなければならぬ。それにも拘らず(1)の上の詩節が、(1)+(2)として実質的に或る一つの全体を構成するために、(2)の下の詩節に調和しなければならぬ。しかし、形式的には文法的文体的統一は要求されない。Tはふたたび(1)の上の詩節に相応するFの詩節(2)を詠まなければならぬ。以下それを繰り返して、従ってそれぞれタンカを形成する。つまり(1)+(2)、(1)+(2)+(3)……このような方法で五十、百、いかなる詩節が交互にたらなるのである。一見この種の作品は一篇のすぐれた偉大な詩のように思えるが、内実はそれを貫いている精神的糸もなく、ただ次つぎに縫い合せた作品に過ぎず、芸術的価値の低い遊びである。ケテンゲディヒトは平安時代におこなわれ、金葉集に連歌として初めて紹介される。当初は下層階級ならびに

中流階級の人びとの間で愉しまれていたが、やがて僧侶や隠者にも伝わっていった。そして二条良基から宗祇、守武、宗鑑らに触れ十七、十八世紀にその隆盛期をみた、としている。そして最後に

なべて世の風をおさめよ神の春

以下六句を独訳し、ケテンゲデヒトは洗練された芸術作品としてどちらかと訊ねられれば、それはなんら美的価値をもつことはできない、と結論をくだしている。

フロレンツの『文学史』では「日本の風刺短詩」の章で芭蕉がでてくるが、ここでは触れていない。しかし、これがドイツへ最初に伝えられたレンガの説明であった。本書は三回に分けて刊行され一九〇九年に完結している。当時ヨーロッパにはジャポニスム（日本趣味）の風潮もあり、この頃クルトが一人の日本人と協力して『過去千四百年間の日本抒情詩』を著わし日本の詩歌をドイツで紹介するが、連歌は載っていない。二十年代になるとフランス・ハイカイ派をおして再びドイツに日本の短詩型文学が注目されるが、それはおもに三行十七音節のハイクであった。その後、社会状況の急速な変化、また第二次大戦の影響などあり、両国間の文学交流は特定な作家を除いて停滞期に入る。しかし四十年代末になると、ウィーンやベルリンなどで俳句をとりあげようとする傾向が活発になり、五十年代になるとクラインシュミット（一九一三〜）やポードマースホーフ（一八九五〜一九八二）により俳句がドイツ

ッ語圏でハイクとして成立する。やがてハイク実作者のなかにはハイクを一群の連作に編成し、これにメロディーをそえるようになった。

ハイクやタンカに関して多くの作品を発表し、数年前からは短連歌の唱和形式をとり入れ「レンガ」と題し、今まで数点の詩集をだしたニエダアザクセンの郷土作家で、現在ドイツ川柳協会の名譽会長でもあるカール・ハインツ・クルツ（一九二〇〜）は昨年注目すべき作品を発表した。「日本の手法に基づく三人の鎖連歌」という副題をつけた『風のうた 三人連句集』で、すでに版を重ねている。序文には『今鏡』の第八「花のあるじ」から少将公教、大将有仁、越後のめのと、この三人が詠んだ句

奈良の都を思ひこそやれ
八重桜秋の紅葉やいかならむ
時雨るる度に色や重なる

をローマ字で二行三行二行に分け、次のように独訳している。独文に則して再び直すと

私の想念は飛んでゆく
奈良に向かつて、首都。
桜の花

フジワラ

そして赤くなつた秋の木の葉――
誰にそれは似ているであろうか。

ミナモト

秋の秋雨はそのたびに
葉の彩をふやしてゆく。

エチゴ

出典 イマカガミ／現在の鏡／二一七〇年

この独訳に続いて、クルツは読者にたいし確信に満ちた文

身近なものが生んだものは
遠方の奔流のなかで再び

沈まなければならぬ

リヒテンフェルス

総て移いゆくものは絶えることなし
魂のおくそこで

デネケ

親愛なる皆さん、本冊子はごく限られた親しい作家に協力を願ひ、ドイツ文学の領域に一石を投ずるものがあります。三名の作家で一篇の作品が構成されま

フランスではかなり前から連歌が紹介されているが、ドイツで人びとの間に知れわたるようになったのは、俳句が三行詩（ドライツァイラー）ハイクとして定着した後、ここ数年とみてよいであろう。しかし、それもまだ十分というわけではない。或る意味で思考方法のまったく違う国で、今後どのように座の文学が受け入れられてゆくか、愉しみである。

しかし数世紀たつうち一定の決まった方式ができました。即ち最高度に洗練された七・七と五・七・五と七・七の音節から構成される三人で詠むケテンゲデヒトです。第二詩句は第一詩句と関連し、第三詩句ともやはり同様につながってゆきますが、第一と第三詩句にはいかなる関係も存在しません。それにも拘らずこの三詩句は、読む人に調和を認識させなければなりません。即ち各詩句ではなく全体が問題になるのです。

そしてこの連句集には二六篇の作品が各三人の作家によって構成されている。そのなかで表題となった「風のうた」一篇を原文に則した訳で紹介する。

彼女の許へ向かつて帆走する
私の風のうたよ

クルツ

| | | | |
|---|-----|--------|-----------|
| 東 | 明 | 雅 | 著 |
| 猫 | 芭蕉 | 連句入門 | 夏の日 |
| 蓑 | の恋句 | | |
| | | 永田書房 | 角川書店 |
| | | 価 320円 | (絶版) 700円 |
| | | | 中公新書508号 |
| | | | 価 380円 |
| | | | 岩波新書91号 |
| | | | 価 2300円 |

俳諧師 (二)

——その心と生活——

東 明 雅

(承前) 先ず、その名高い人の門を叩く、玄関に来意を告げ、添書を出す。一二、言葉のやりとりの後、詠草を認めて出すと、庵主も詠草を認めてくれる。いずれも結構の御句ばかりであります。此うちの何々の御句をいっただいて、脇を試みてみたいと言って、すばやく五句付けて評を乞ふ。いずれも結構であるがと言って、いずれかを決めてくれる。

爰で相当の脇句であれば、マア上つてと云われれば上々、これに反して脇句に付く句がないと、何とか筆を加えて決定して、第三を一句付けにしてくれる。又四句めでもじもじしていると、添書の手前、追っ払いせぬが、宿でも教えて明日来るようとする。

脇句で力の程を認められ、草鞋を脱いで裾の埃を払って上がり、改めて挨拶し、何分よろしくと頼む。それから第三を付けてくれる。四句めを付ける。五句目を付け、

たかとときく、ええ、ありがとうございます沢山頂きましてと礼を述べる。どうだなもう一人、一寸遠いがと又紹介してくれる、之も前と同じように紹介してくれる。之も前と同じように二三日過ぎ。こんな塩梅にばかりだと行脚の苦しみも艱難もないが、親切に教へ導いてくれる人もあり、随分苛酷の目にあわせる人もある。

(芦丈翁「芋日記」所収)

あまり文章がおもしろいので、長々と引用してしまつたが、ともかくも座敷から座敷への行脚が二ヶ月も続くと、もうよほど力もついて来る。このような旅を半年・一年と続け、二百巻なり三百巻なりの歌仙を満尾して帰り師匠に報告すると、師匠も大変よろこび、ここで初めて文台を許され、文台披露をすることになるのである。

尤も、これは文台を授与されたのを披露するばかりで立机ではない。立机というのはこれから俳諧一本で生計を立てて行く業俳になるとの宣言である。

この芦丈先生の書かれた俳諧行脚は、大体、明治ごろまでの話であろう。芦丈先生の年譜を見ると、昭和二十五年二月、喜寿記念に中国・四国・九州行脚に出発し、四十三日間の旅行をされた由であるが、これは連句復興のため諸国を廻っては教へて歩かれたのであって、右に述べられた俳諧修業の行脚ではない。

ところで、私は近時、「紅葉日記」という本をいただいた。この本の著者神戸春雄は同じ信州埴科郡であるが、彼

折端をと、表六句ができると爰で都合を聞く。行脚の身であり、先を急ぐわけではないから、一卷満尾するようにと頼む。すると庵主はむさくるしい所であるが、旅の話もききたいからと泊めてくれる。明日ゆるゆる一卷楽しむことにして寝かしてもらおう。

翌日、朝から始めて、半日おそくも一時か二時迄に満尾する。此一巻でそこそこ出来ると思れば、門下の一人位に紹介してその家を教へてくれる。その門下の人には悦んで迎え入れ、近い所の同僚などへ沙汰して、二人三人と集って、出来る者は両吟をはじめ。色紙だの画帖などを頼む者もあるなどで、二日三日位もしてお暇する。草鞋銭も包み見送って袂を分つ。

夫れから前の先生の所へ来て、お陰様で歌仙も何巻満尾し書きもの等云々、いかがでしたか。挨拶はありまし

が大正三年十月十四日から、その年の大晦日まで八十日間の長きにわたって、県境を越えて俳友と風交し、師をたずね、俳諧の道を修行した様子がこまごまと記されていて大変興味をそられたことであった。大正初年ごろまではこのように俳諧行脚が実在したのである。

そのあらましを述べてみると、埴科から史料へ出て松本を通り、塩尻・諏訪・上伊那・下伊那と南下し、十月の月末には伊賀良村(下伊那郡)の友人の家にとどりつき、一週間ほど骨休めをしている。この間、行く先々で俳人を訪問しているが、彼が訪ねた俳人の大部分が不在と記されているのは、彼の不運だと思われるけれども、あるいは、見ず知らずの行脚に対しては居留守をつかう者も多かったのではなからうか。

彼は別に師匠の添書を持って行ったような様子はない。そのためか、たまたま在宅した宗匠も彼を家に泊らせて、歌仙を巻いたり、弟子を紹介したりしたような例はあまりない。その点から言えば、彼は芦丈先生のいわゆる座敷行脚ではなくて、上り端行脚(玄関であしらわれ、表六句だけ指導を受け、安宿を紹介されて泊る俳諧師)であったと言えよう。

しかし、彼はそのような待遇にもめげず、あらゆる困難に耐え、足まめに方々の宗匠を訪い、話を聞き、その熱心さは異常な程である。

元々、郷里を出て松本に来た時、彼はちょっとした手違いで所持金をほとんどなくしてしまつた。それ故、松本か

ら先は実に不自由な旅を続けている。下伊那で昔の友人の家にころがりこみ、居候をきめこむが、友人の奥さんの機嫌がだんだん悪くなるのでたまりかねて、金一円を借りてまた旅を続ける。信州から天龍川沿いに遠州へ入る所など、道は峻しく、雨は土砂降りで大変な苦勞の様であった。

峠道険悪にして道幅二尺に満たず、丸木橋を渡り岩角をよち、山又山に入り、谷又谷をめぐり行けどもく山深くして、人跡たへたり、雨は車軸を流すが如し、濃霧溪間を覆い、方向だに見えず、身体は濡鼠の如くなれども、是又行脚の常と思へば、さのみ難儀とも思わず、一つの山頂に至る。

天竜は底を流れて霧の海暮過る頃山里見ゆる処に出たり。是奥山村内裏といふ所也。

このようにして遠州に入り、彼の師匠である大庵庵十湖の家に到着する。ここで丁度、時雨忌と青島陥落祝賀会とが兼ね行なわれたので、正式俳諧の手伝をし、五十韻・百韻の教巻を興行したと記してある。そして、その後始末をして、約一ヶ月滞在し、岡崎・大垣から大津へ出て、義仲寺の墓に詣で、岐阜から木曾路に入った時は、大正三年の暮も押しつまった頃であった。

この頃、彼は全く無一文であった。牡丹雪の終日舞う中を須原から藪原へ来て、鳥居峠を汽車に乗れば八銭かかる。「思へば、是又俳諧の道義を悟るの一端」と言っているように、極限状態におかれてこそ、人間・人生の真の姿を見ることができるといふものであろう。俳諧(連句)は人間の状態・感情を様々に描写し、叙述するものであるが、それには人間・人生の本当の姿を、その極限状態において把握することが必須であらう。

「行脚」というものは、諸国の風光にふれ、各地の宗匠に相手してもらって俳諧の腕を磨くものであるとともに、修業中の俳諧師に人生・人間の真の姿を知らせるために考え出されたものである。

芦丈先生の文章と、神戸春雄の日記とを読みあわせると、つい五・六十年前まで存在した「俳諧師の行脚」の精神と状態がありありと蘇って来る。今日、俳諧(連句)は復興したというが、その作品はまだまだ前世を凌駕するまでに到っていないのは、連句を楽しむ人たちに、先人の苦勞、ことに行脚の苦勞による身にしみこんだものがないのが、その原因の一つではないだろうか。

このように苦勞して一人前になり、立机し庵住して生活して行けるようになれば、それは俳諧師として一応の出世である。しかし、せっかく庵住しても、弟子がすくなく、収入が乏しければ定住できない。そのような場合、元の農業へ戻るなどのことは、武士が鋤鎌を執るのと同じで、絶対に行きぬこととされ、彼らはまた行脚に出るよりほかはなかったという。そして再び開庵する、それでも駄目ならまた行脚に出る。こうして、誰は十年草鞋を履いた二十年

というので、徒歩で越え、午后二時檜川に到着、それから夜道を歩いて九時ごろ塩尻に着き、安宿に入ってほっとするが、米代を請求され、事情を話して、自宅より為替の来る間滞在を頼むと、亭主はしぶしぶ承諾する。二十九日は朝三合の飯を求め、昼もこれで済まし、一碗ほど残りがあるので、夜食は一合で足りたと書いてある。三十日も持ち合わせた物品を預けて、朝食に三合の飯を求め、昼飯にはその三合の残りに茎菜漬をおかずにして胃の腑を充たす。

隣り座敷にては、鹹を焼くやら、豆腐を買って来るやら、さまざまの奢りをなす。予は骨飯の有さまにて、只菜葉の塩漬を乞ひ、無上の香物として腑を肥す。思へば、是又俳諧の道義を悟るの一端ならんや

信用と功德の母よ大晦日

午后の三時頃、為替を得て、鳥に翼の思ひをなし、姨捨まで汽車をかり、此処よりこうこうたる寒月の光りを踏み、我が草庵に帰りしは夜の十時頃なりき。

年の瀬やここより舟のきし戻り

帰庵を訪ひける二三の人々と、酒酌みかわしてふしぬうちとけて飲む酒うまし年の暮

このような辛い思いをしてまでも旅をするというのは、もちろん「片雲の風に吹かれて漂泊の思ひやまぬ」内心のそぞろ神にひかされてのことであるが、春雄が塩尻の宿で無一文になり、一日三合の飯だけで命をつなぎながら、

草鞋を履いたなどの話が残っている。

小林一茶の四十歳代以後の生活は、まさにこの巡回俳諧師としての生活であった。一茶がその長い西国の旅から帰ったその翌年寛政十一年(一七九九)彼は師の二六庵を継いだ。しかし、彼はその時、宗匠の待遇を受けず、葛飾派の執筆として、判者たることを許されたのだと言われる。これでは江戸の家に坐ったままでは食べていけないのは当然であった。それで江戸近在の葛飾派関係を巡って歩く生活が続くのは止むを得ない。

一茶は二つの旅のルートをもっていたと言われる。即ち一つは、馬橋・流山・布川を中心とする葛飾一帯であり、もう一つは木更津・富津を軸とする上総ルートであり、これが文化九年、五十歳で郷里の柏原に帰京、定住するまで飽きることなく続けられた。記録されたものだけでも下総巡回七十余回、実際はそれ以上であると言われている。

このような巡回俳諧師は、食わんが為の暮らしの必要から出たものであり、漂泊の旅を楽しむ余裕はもちろん、俳諧修業の気構えもすでに消え失せ、ただ日常的で現実的な心の世界が見られるのみの味けないものである。それでも、身体の達者であった頃は、一茶もその旅を楽しんでいたが、次第に身の衰えを自覚するようになり、柏原で継母や弟とすったもんだした揚句、家を半分手に入れ、妻を娶ったのは五十二歳の時であった。これ以後、いろいろな問題があるが、原則として彼は柏原周辺の弟子の家を歩きまわることになる。

彼の弟子は上越国境から千曲川左岸にかけ十六ヶ所約四十名、千曲川右岸、中野・湯田中などに二十名、計六十名位と言われているが、それらの家々を巡回する旅が、文政十年（一八二七）六十五歳の終焉の前まで続いたのであった。

これを彼が三十歳から三十六歳まで、足かけ七年にわたって続けた西国の旅が、若かっただけに、また二六庵宗匠となる希望もあって、一途といつてよいほど熱心であり、すべてを学ぼうという精神にみちみちていたので比べて、何という相違であろうか。彼の境遇・歳月が、はっきり彼の旅の性格を姿容させてしまったのであった。

巡回俳諧師にもいろいろの種類がある。各務支考・沢露川、あるいは松木淡々・大島蓼太などになると、その旅の様子は大勢の同伴をつれたすばらしく豪華で派手なものであり、漂泊・行脚の趣きは微塵もなくなくなる。口では風雅を唱えながら内心は私利私慾をほしのままにし、自己の流派の勢力の拡大に汲々とするものであった。

右のような連中にはいずれも高名であるから豪華な旅が送れるのであるが、それ程でない連中はまたいろいろの方法を使って旅に出て、自分の俳諧をひろめ、勢力を伸ばそうとした。たとえは、さくらを使つて宣伝させ、さてと乗り出して行く、そしてそんな場合にも、自分の師系を誇り、あるいは珍らしいものたとえば芭蕉の遺物などを持って行くことが非常に効果があったと言われている。

式亭三馬の「浮世床」を読むと、芭蕉を真似して諸国行

脚に出て行った俳諧師が、旅の途中で狼に食われた話が出ているが、そこで皆に批判されている通り、外見だけ芭蕉に似せて、内容はかなりひどいのが多かったであろう。ことに近世後期では、俳諧師は旅芸人や博奕打ちと同じように見られて、村によっては立寄ることを禁せられたところもあったと言われている。

しかし、墮落だろうが何であろうが、俳諧師として生きることのできた者はまだ幸福だったと言うべきだろう。たとえば一茶などはとも角も生活するには十分の家と資産とを晩年には確保できていたからである。数多くの俳諧師の中には、一生ぐるぐると流浪の旅を続け、遂には文字通り野垂れ死にをした者もすくなくなかった。乞食井月と呼ばれる井上井月の場合など、その代表的なものである。

彼は文政五年（一八二二）生まれで、もと越後の長岡藩士だった。天保十年（一八三九）ごろ江戸に出て、諸国を巡り、三十七・八歳の頃、信濃国伊那の地に入り、以後、家も持たず、妻も持たずに、流浪・漂泊の旅を続け、連句を作り、酒を愛した。明治二十一年上伊那郡美簗村で、行き倒れになり、「何処やらに鶴の声きく霞かな」の一句を辞世として歿したという。

乞食井月とは卑めるけれども、俳祖芭蕉でさえも、本質的には乞食であったし、彼自身も乞食の境涯にあこがれている。（なほ放下して栖を去、腰にただ百銭をたくはへて、杖一鉢に命を結ぶ。なし得たり、風情終に孤をかぶらんとは——栖去之弁）

の句があるが、流石に、俳諧師の本質をよく悟った句であると感嘆を禁じ得ない。

先師芦丈翁晩年の句に、自画像と題して、

雲よ霞と六十余年の花乞食

モロツコ吟行

中島啓世

今年三月の旅は、めずらしく「色」の印象が深かった。まずパリから飛んだ、モロッコの上空からは、パッチワークの絨毯をしきつめたような島地や、さすがブレサハラらしい代赭色の土地が見えた。首都ラバトではアーモンドのピンクの花が霞むように咲いており、カーキ色のカスバ（とりで）の上には大きいこげ茶の菓を二羽のこうのとりが守っており紺青の空はまるで絵葉書のようにだった。カサブランカは名に違わず白い家が多かったのと、ノートルダム寺院のステンドグラスの図柄が、今までに見た国々とは違って、聖マリヤを囲んで祈る人々が全壁面につづく華やかさに息をのむ思いだった。豪邸のアラビヤ模様のモザイクタイルの天井、壁、床の美しさ、紅い実を

つけたピラカンサスの刈込み、メデイナ（旧市街）のスートの小店に並ぶ、ひもや財布、スリッパなどの品々、またはホテルの中の豪華な彫金のランプシェードから細やかにこぼれる光のもと、優雅に着こなされたセラバ（長いモロッコ服）そして飲むこげ茶色のエキस्पレッソコーヒー、アーティチョークのアイヴォリ色、緑の薄荷の葉を入れた甘いお茶。古都、フェズからバスで北東の港都タンジールまでゆく途中の田舎道からは、薄紫のそら豆、白いえん豆、オレンジ、まさにオリーブ色のオリーブとモロッコの色は限りなくつづく。

タンジールからジブラルタル海峡を渡ったスペインのコストデルソル、又南仏ニースからマルセイユまでのコートダジ

ユールでは満開のミモザと緑の傘松に会うことが出来た。エキサンプロヴァンスの花々、マルセイユのヨットハーバー、数え立てれば限らないカラフルなこの旅で、一番驚いたのはモロッコのスパルテル岬から見た地中海と大西洋の色がくっきりと線が引かれて青と緑にわかれていること、今一つは北極廻りの機翼から虹が下っていたこと、どちらも初体験で深く感激した。

巖窟王こもりし島の霞みあて
名の違ふ海にて春潮色がふ
彫金のシェード透かしてもる春灯

幾たびかの雪のあと、久しぶりに快よく晴れた日、道の片側に残る雪や、凍てゆるむ道も、春きざす明るさに心はずむ様な朝でした。

照敏先生の立句は、私達の思いそのまま、雪解けの愉しさの中に歌仙は始まりました。早く着きすぎた和子さんと私を、草間理事長は、俳句文学館をくまなく御案内下さいました。句会のよく開かれる四階の和室にはお雛様が飾られていて、その御由緒などがかったことも楽しく、そのまま第三の句に頂いてしまいました。

子を孕む秋の蝮に気をつけよ 徒司

まずこの句に息を呑まれ、スピードばかり出るカードに、何か怖れに似た予感が、と思っけていますと、一転、断崖の白い怒濤に、楸師の佛がふと浮かび、茄子づくし、仏蘭西料理のフルコースに、浄土が仄めいた花の宴。

ふらここ父へ戻りて母へ 照敏
行春の薄人情といふ言葉 時彦

このあたり、何となく轆轤のゆれと薄人情に漂よう詩情、「こういうのが腰昧の美学ではないか」との照敏先生のお言葉もうなずかれ、猫好きの面白い句もナオらしく、こちらの恋はぐつと変って、近頃の世相がちらちらと垣間見られ、恋はなれにはやはり向日葵が咲いていなくてはなりません。

李太白月の筵の端に居り 時彦

酔って江に舟を浮かべ、映る月影を捉えんとして没したとも伝えられる李白には、姥は新酒でもてなすべきであったと悔んでいることでしょう。

菊枕すこしの呆けはそのままに 和子

さすがに「呆け」についての碩学の句でありました。
明雅師の句いの花の揚雲雀に、水温む川舟の長閑さのうち首尾となりました。

窓の外は何時の間にか雪、時彦先生が「月花に次いで雪の座があっても」との御言葉も思い出されました。

雪解けといふ愉しさを来りけり

春寒の香の桜餅など

雛かざる瓔珞の玉ゆれてゐて

枳殻垣に破る袖口

東の指さす方に月淡く

四圍に満ちたる蟋蟀の声

子を孕む秋の蝮に気をつけよ

首のうしろがこそばゆくなる

トランプのカードスピードばかり出て

土佐の断崖濤ましろかり

鯖酒を始めましたとお品書

月を仰いで着ぶくれの客

値上げせしタクシーは棄て歩きけり

煙草いらいら靴底で消し

焼茄子に煮茄子鴨焼漬茄子も

フォアグラのあとエスカルゴまで

このままで浄土見え来し花の宴

ふらここ父へ戻りて母へ

行春の薄人情といふ言葉

留守番電話苦手なのです

ちまちまと小さき家建つ坂の町

飼主よりも上品な猫

掌に握れる程の下着干し

ペントハウスにわれの教へ子

訣れたるあとに向日葵咲いてゐて

柩に三度石で釘うつ

からからと鈴をこるばす秋の風

蘇州城外高き藁堆

李太白月の筵の端に居り

姥は白慢のところがてなす

菊枕すこしの呆けはそのままに

酔へば本音がほろとこぼるる

宿跡に二つ立ちたるくなど神

日癖雨止み春の夕焼

揚雲雀聞きてほんやり花疲れ

親舟子舟水温むなり

昭和五十九年二月十九日首尾

於俳句文学館

連衆

平井照敏

草間時彦

米谷貞子

式田和子

杉内徒司

照敏

時彦

貞子

和子

徒司

明雅

和司

全和

徹全

司徹

貞司

敏貞

敏貞

彦敏

敏彦

敏彦

貞敏

敏貞

彦和

和彦

司和

敏和

和敏

敏和

彦敏

司彦

敏彦

和彦

彦和

和彦

貞和

和貞

全貞

司全

雅全

彦全

絶頂の城

付勝練習歌仙

東明雅

投句締切 7月20日

絶頂の城たのもしき若葉かな

夏鶯のこだまする溪

枕蚊帳熟睡の夢の安からん

寝る番茶に茶柱の立つ

五句目

治定 抄らぬ稿にしらじら月さして

次位 一人碁の戸の面に月をあふれしめ

つれづれの三味爪弾かん月今宵

居残りのピルの窓辺を照らす月

雲はやし名月を待つ句座に居て

鉋屑払へばほのと月のぼる

筆嚙みて墨を含ます萩の月

出展の絵も仕上りて仰ぐ月

晴着縫ふ手休め窓に仰ぐ月

宴たけて出れば月の円かなる

居待月文庫の詩集誦しつ

無村

正江

樗晴

東夷

隆秀

瑞枝

正雄

杉亭

麻子

孝子

正江

黄夜

貞子

明声

千町

東夷

芒活け月見の客の人数聞く

坪畑の収穫盛りて月を待ち

月待ちて芒りんどう壺に活け

夜半の月祈る明日の勝角力

月出でて踊佳境に入りたり

新小豆ふくらと煮え二日月

ひとり居の祖父訪ねれば月淡く

新しき畳の句ふ月明に

もどかしく電報あける月明り

月清く採用通知音読す

早場米刈り入れ終る野良の月

面舵を取れば岬は月に濡れ

扉の音に迎へに出れば月ばかり

来賓の恩師と仰ぐ今日の月

月光に改札口の灯を消して

望郷の帆船に月を掲げたり

月光の道清ければ吹かれゆく

孫に手を引かれて帰る月の道

地下鉄の階を上がれば青き月

李花子

たかし

美保

哲(武田)

遊

淳子

和子

あかり

櫻晴

蓼艸

峰彦

力

篤子

一青子

みき

夏彦

雪子

☆お茶を飲んでいる景と見る方が自然であろう。だからこの前句にはっきりした外の景、ことに歩行体の句などを付けると付味が悪いであろう。

それから、発句・脇が人情なし、第三と四句目が人情の句で、これに人情なしの句を付けると稿模様になるところであるが、その点は皆さんよく注意された見え、人情なしの句は一句もなかったのはよかったと思う。

さらに前句の「茶柱の立つ」という瑞兆に着目され、それを句想の中心として作句された方もあった。そのようなやり方は「執中の法」と言って、確かに付句の一手法ではあるけれども、この場合の「茶柱の立つ」は前句のやすらかな子の熟睡の余情として出て来ているわけであるから、それをさらに使えば気分が転じないおそれがある。このようなくともよく考えて付句はすべきである。

治定の句は、なかなか抄らぬ原稿にいらいらしている気分が、枕蚊帳に満足し切って熟睡している子供の状態から全く転じている。もともと、この巻は発句の颯爽たる景から、脇の夏鶯の声、そして熟睡の子、茶柱と、快適な気分が続いて来た。これはやはり一転しなくてはならない。それには原稿が書けずいらいらしている状態は転じとして全く詠えむきであるので躊躇なくこれを頂戴した。

次位の句も、相手もなくひとり碁を打っている淋しさが溢れ、句の姿もたけ高く、気分も一新され、治定の句と甲乙を付け難い。また「つれづれの……」の句と「居残りの……」の句も付味・転じともにすばらしい。「雲はやし……」の句は打越が枕蚊帳に眠る子に対し、句座は多くの人を連想させその点でも変化があり、「雲はやし」にはただならぬ雲行きが想像され、気分も確かに変化している。

次の「鉋屑……」・「染刷毛を……」・「筆嚙みて……」・「出展の……」・「晴着縫ふ」は何れも何かを仕終えた安堵感・あるいは満足感が見られる。これはやはり、前句の茶柱の立つところに焦点が合わされたためであろう。やはり、ここは角度を変えた方がよかつたのではないか。「宴たけて……」・「居待月……」・「芒活け……」・「坪畑の……」・「月待ちて……」など、いずれも前句に付いていないわけではない。しかし、前句をよく味わって、打越よりの転じを考えると、今一步の工夫が必要である。

以下、「夜半の月……」・「月出でて……」・「新小豆……」・「ひとり居の……」など、とりどりにおもしろく、また、「面舵を……」とか、「望郷の……」とか、船の生活が二つあったのも変わっておもしろかたが、「望郷」はやはり述懐めいて、表六句の中では無理であろう。

繰返すけれども、このならば方は決して優劣によっているわけではない。下位にならべたものの中にも、おもしろい句があり、あと一步のところなので、元氣を出して次の付句を応募していただきたい。

次は折端の句である。前句が月であるから、秋の季語を使って、七・七の短句をまとめて欲しい。打越が人情自の句であり、前句も人情自の句であるから、今度の句は人情他か人情なしの句にしていきたい。

五句目は月の定座で、いろいろな月が出て楽しかった。もともと月は戸外のものであり、四句までは、発句・脇が外、第三から内に入っているもので、今度の五句目は原則として内・外の景どちらでもよいのであるが前句「寝る番茶に茶柱の立つ」というのは、外で茶を飲んでいる景と見られないわけではないけれども、やはり家の中で坐って☆

大観自伝によると、五浦時代静かに想を練っていると、崖下の洞穴に海水が押し寄せては又戻って行く。その音を静かに聞いていると、チャンボン、チャンボンと響く。曾って水戸烈公がそれを「鉦鼓洞」と云ったと伝えられ、大観の雅号となった。

この五浦の真向かいが北米シアトルで、風船爆弾が太平洋岸の数ヶ所から沢山飛ばされたが、この五浦海岸もそのひとつであった。岬の突端に、天心自らが設計した六角堂があり、釣糸を垂れ思索にふけた所である。啓世さんのお骨折りで特別に入れて頂き、畳に坐って春の潮騒に耳を傾けることができた。立句を互選していた大観狂の部屋から、折しも玻璃戸を額縁に、大観の松と沈まんとする太陽が見えて、荘嚴の極みであった。

大観別荘で午後七時より膝送り歌仙二巻を同時に巻き始める。立句の人が対角線上に坐り、月花は一句づつで、その場合、A歌仙B歌仙は別個に考える。雪見障子を開けると、春星が梢に瞬き、闇に遠く浪音がとどろく。

「誰が撞くやら夜明の鐘は粋はつかない、野暮が撞く」

鳴たゆたふ春の夕焼
一人甚の燭あたたく更くるらむ
師説を継ぎて古書の校註
丸窓の外に松あり午後の月
秋刀魚の煙立てる隣家
稲架ぶすまくぐりて湖の観世音
古戦場ゆく若い娘をつれ
漆黒のアンサンブルのカラス族
汗の膚を風のくすぐる
河鹿鳴く木の間の月の夏館
ロゼ・クワントロ・パーボンもあり
戒めの笥に這へる地獄絵図
匙も曲らぬ程の念力
ダイエット中の雑煮はポテト餅
風船とばす始球式なり
花の顔古里人もほほえみて
繭ごもりたる板の間の艶
ポンゴレの浅蜷の殻のうづたかく
コスタデルソル波乗りの群
瞳の碧き娼婦の肌を魅せられて
濃紙くはへて口紅を拭く
抓められて叩く邪険な男伊達
もろみやさしく熟す雪の夜
風花の消えたる梢の星明り
忘却こそは神の賜物

孝子 宗教に根ざす戦さの果もなし
瑞枝 幻のごとうかぶタンカー
徒司 月天心うす紫の思ひ草
麻子 つまみ出したるおかまこほろぎ
彬風 ひとり寝のひとり気ままに秋の蚊帳
正江 李白も杜甫も旅に死にたり
啓世 公園に太極拳の悠々と
杉亭 噴水の水高く吹き上げ
明雅 糸桜花ははつかぬ風を呼び
千町 春の絵日傘遠ざかり行く
和枝 翌三十一日、勿来の関跡をみて、落て若
孝枝 布をひろい、岩の石蓐を春風に吹かれつつ
司麻 掻いた。
麻風 長塚節の「隣室の客」に出てくる平潟の
江世 漁港は色鮮やかな大漁旗が風になびいてい
世亭 た。保養館で海の幸の昼食、やなぎがれい
雅雅 の姿が美しい。ここでは出勝ちで二時間余
町和 で一歌仙まく。午後から風が出て、海辺の
和孝 気温が急に下がる。
孝枝 関所跡
千町 明雅捌
孝子 桜には早し勿来の関所跡
正江 鷗をあはる浜の荒東風
滴らす若布の緑手にさげて

これは廊下に掛かっていた野口雨情の書だが、今宵の恋句の気分を醸しだしてくれ。将棋の米長王将が、「将棋は死んだ父親の柩の前に座る気持で指すから正座なんです」と云っていたが、この大観別荘も自ら正座してしまふ雰囲気のみならず、午後十一時にめでたく巻き終る。

鉦鼓洞 (膝送)

鉦鼓洞めがけて春の波がしら
霞む鳥のむせび鳴く声
青饅を朝餉の膳につけ足して
沸る茶釜の味を染しむ
中空に語ふが如き古都の月
芒かるかや刈りある人
値ふみする晚秋蚕の繭つかみ
氣にしないではよんの冗談
おとなしい癖に彼女のからみ酒
牙も持たずに送り狼
薔薇の咲く門に付けたるスポーツカー
鱧の皮きる狙の月
近ごろのグリコ何かとほろにがし
歯型の合ひしニュースでか
偽牧師イエズス・キリスト住み給ふ

あけてびっくり浦島の箱
花便り単身赴任帰りたし
ぐんぐん伸びる雨の麦畑
調絃のAのひびきて春くるる
卒業すれば恋が始まり
配達を待ちかねてある手紙来て
日本脱出空の道行
末期の目ふたりに山河美しき
一つ火灯るしじまなりけり
寝ねがてに小豆の粥を鍋にかけ
人も老いつつ犬も老いつつ
ジャズダンスエアロビックスフィットネス
魚の目ありて大き靴はく
藝口の中にさしたる月あかり
無常迅速ぞぞる寒き夜
松籟の「潮心庵」の冬仕度
一風呂で濡らした髪を乾かし
手を挙げて生徒集むる教師吾
お玉杓子の瓶にいっぱい
周山の常照皇寺の花に会ふ
陽炎ゆるる谷間の道

夢の碑 (膝送)

長い休暇を終へて帰る児
傾きし庇にかかる昼の月
栗飯炊くと栗を剥きをり
村人の競ひ並べし案山子展
磯山はりし女人あふ向き
をば様に手練手管を教へられ
そんなそんなと言はれないうち
投函のあとの悔恨青嵐
土用うなぎのさはめける月
大川に新内流す屋形船
酔うて分らぬ部屋番号
凍裂の立木の嶺北の果
グラッドスラムダブルリダブル
首抜きの花衣なり千社連
せまき路地裏燕すれすれ
炬燵の雑布かたくしぼりをり
鐘撞きに行く顔の幼き
軍中膏蓋の油の輝葉
四股名で出したちゃんこ料理屋
若妻の紺の法被に惚れ直し
キスを盗むは階段の下
近頃は炭団の目なき雪達磨
まいてもまいてもついて来る犬
血庄を下げればつる物忘れ
先づは当用のみで早々

葺きかへし社殿を照らす月青し
 翡翠色した銀杏を焼く
 戦后とは次の戦前そぞろ寒
 ものにはよらぬ人の貧福

あがりたる税の下の鬼瓦
 バイブひねってくだい講釈
 花の友お八ツには皆手洗って
 磯の遊びに上る喚声

五つの浦には足りない三歌仙半であった
 が、近代美術発祥のゆかりの地に於いて、
 大観らの隣随派が学んだ事と思ひ合わせ感
 概深いものがあつた。

質疑応答

付心と付味

問 付心はよいが付味が今一步などいわれませんが、付心・付味について具体例で説明して頂けませんでしょうか。

(東京都 福井隆秀)

答 「付心はよいが」というのは「付心は分かるが」ではないでしょうか。付心とは前句に対して付句がどのような関係で付いているかを言うのですから、よいも悪いもありません。付心と付味については私の「連句入門」一〇八頁から一二三頁あたりによくわしく説明してありますし、また、この書第五章の作品鑑賞では「冬の日」の「狂句こがらしの」の巻を取りあげて、具体的にその付心・付味について一つ一つ説

明してあるので、その辺を読み返していただきたいのですが、芭蕉の作品では分りにくい点もあるかと思うので、小出きよみさんの「花野」から現代の作品例をあげてみましょう。

ひとり出て里をめぐりぬ西行忌

- 1 酒は一合菜飯にて足る(付心) 其人
- 2 残雪光る四囲の山々(〃) 其場
- 3 亀も漸く鳴きそむる頃(〃) 時節
- 4 寺の大屋根鳥交る午后(〃) 時分
- 5 曇りつ照りつ遠霞みつ(〃) 天相
- 6 やや停年も身に迫る春(〃) 時宜
- 7 変る浮世に背をむけて住み

(〃) 観想

8 トンネル一つ雪残る国(〃) 面影
 一つの前句に対し付け方(付心)はこの通りいろいろでそれがよい、どれが悪いとは言えませんが、付味のよいのは2・3・6あたりでしょう。

雁帛往来

▽ACC東明雅師担当「連句実作」を三カ年(昭和56年4月―59年3月)受講された左の八名に明雅師から蕉風伊勢派傳道書が三月二十八日贈られた。

- 馬場彬風 氏原正雄 秋元正江
- 坂本孝子 米谷貞子 歌川和代
- 秀島みき 吉沢てるよ

なお五月十六日、この連業で上野の鷗外荘で記念の左記歌仙興行二巻を首尾した。

鷗外旧居

舞姫の傍にはふ若葉かな 孝子
 庭漣の音響く沙羅の木 明雅
 広縁に聞く鶯の声老成て 彬風
 クリーニング屋の自転車をとめ 正江
 指させし彼方に淡き昼の月 徒司
 芋煮会して河原賑はふ てるよ
 身ほとりのそぞろ寒なる留守をもち 正雄

連句会案内

○A・C・Cゼミナール

日時 第二・四水曜午後一時―三時
 会場 新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター
 新宿区西新宿二ノ六ノ一

(電)三四四―一九四一(代表)

入会金 五千元
 受講料 一万一千四百円(三ヶ月)
 二万二千元 (六ヶ月)

○連句教室 会費千円

日時 第一日曜日午後一時―五時
 会場 関口芭蕉庵
 文京区関口二ノ十一ノ三

(電) 九四一―二四四五

季刊「連句」第五号 定価五百円
 誌代 年二千元(送共)
 発行 昭和五十九年六月一日
 編集人 杉内徒司
 発行人 東明雅
 季刊「連句」発行所
 〒277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二
 電話〇四七―一七五―一―九二
 振替口座 東京七―五二―一三三

解かれしままの銀つづれ帯 和代
 貞女てふ名にしはらるる因果にて 貞子

(以下略)

庭漣

庭漣のひびき文豪旧居なる 正雄
 雨待つ新樹とりどりの彩 明雅
 笑顔の師遠き席より酌に来て 和代
 うしろを向けばついてくる猫 貞子
 夕月に想い出したる唄の節 節子
 依編む人灯のもと 明雅
 広土間にかまど蟋蟀髭を振り 彬風
 手紙の束の散らばりしまま 正江
 傷心のホロホロ鳥の独り酒 徒司
 五百羅漢に恋を偲びて てるよ

(以下略)

▽明雅師指導の「電通連句会」は昨年十一月発足してから早や二歌仙をあげたが、四月二三日満尾した歌仙の表は左の通り。
 雪野裂きにくく光りて春の川 俊二
 風の音聞き遊ぶ芽柳 憲助
 椿餅賣り出しますと筆太に 徒司
 魔法壇からお茶ばかりのむ みどり
 夕月の滴るばかり青き空 明雅
 虫籠かへへ駅を行く人 り
 ▽東京堂出版の委嘱で明雅師は新進の研究

者とともに今年一月から『連句辞典』の編纂をすすめている。出版は六十一年春。

▽明雅師は俳人協会愛知県支部主催の東海俳句大会(五月六日・名古屋芸術創造センター)で「名古屋市における芭蕉」を講演した後、『笹』(伊藤敬子主宰)連衆と白壁町「双葉」で、「俳諧の生ぶ声の碑や夏燕」(明雅)の立句で歌仙を興行首尾した
 ▽馬場彬風氏著「論語漫筆」が五月十日出版された。一代の碩学富永半次郎氏の鉤槌を受けた氏が、論語の中に連句と相通うものを見出したの論、ならびにその実践としての家庭連句は、注目・傾聴に値する好著である。

申込は左記へ

『論語漫筆』詩についての諸章と連句
 家庭連句抄
 定価五〇〇円(送料二〇〇円)

発行所 双文社
 〒101 東京都千代田区三崎町三十一六一
 一五 東和ビル二〇五
 振替東京七―八九二九四
 振替東京七―八九二九四
 前号十二頁、四吟歌仙「時雨」の発句は「時雨るるや真行草の石畳」でありました。誤植がありましたので訂正致します。